

東北未来リーダーズサミット

本県2人のスピーチ

東京で今秋開かれた「ビュートウモロ東北未来リーダーズサミット」(一般財団法人教育支援グローバル基金主催)岩手、宮城、福島の高校生らが被災体験を共有し、東北の未来像を提言した。サミットで、本県の2人が行ったスピーチを紹介する。

小川 彩加さん(18)

(釜石市出身米田・ミシガン州の高校に留学中)



震災で私は家族全員を失いました。両親、姉、祖父母がいなくなりました。これ以上失うものはないと思うくらい私は全てを失いました。

3月11日、地震の後、私は母と祖母と高台に避難しました。しかし、黒い壁のような波は私たちのすぐ背後に迫っていました。その時、母が言った「津波だ」という言葉が、私が最後に聞いた母の言葉となりました。

木に刺さったおぼろげな光景を見たとき、私は涙が止まりませんでした。あのとき私はあんなに悲しい光景は今でも私の頭から離れません。数日後、姉が亡くなったこと、父が行方不明であることを知らされました。遺体安置所で姉と対面したとき、姉の頬を舐り何度もおぼろげな光景を見たとき、私は涙が冷たくなりました。姉の頬はぬれぬれした。もしかしら目を覚ましてくれるんじゃないか、そう思いました。姉から離れたくない。母が言った「津波だ」という言葉が、私が最後に聞いた母の言葉となりました。

山根 りんさん

(宮古商高3年)



私は宮古市という沿岸のまちに住んでいました。学校や家からも海が見えるほど海が身近なこのまちで私は育ちました。

あの3月11日、地震が起きたとき、ソフトボール部のキャプテンの私は、高総体に向けて、グラウンドで練習をしていました。地震の直後、学校に迎えに来てくれた母と一緒に、私は帰宅してしまいました。その途中、津波に遭遇しました。大きな黒い津波に、私は奇跡的に助けられました。母は亡くなりました。

たぐさんの後悔を、すべに現実を受け入れることができませんでした。しかし、残された家族や友人、知人に支えられ、立ち直り、私は前に向かって歩むことができています。

私の使命は、自らの経験や日本の防災について伝えていくことです。将来はインドネシアのスマトラ島や配置などの津波や大規模な被害にあった国で、日本政府やGO・NPOの職員として働きたいという夢があります。

私はいつか弱い立場にある人のために行動する人です。父からは、思いやりを持って人を支えることを学ばせていただきました。母からは、思いやりを持って人を支えることを学ばせていただきました。

たった一瞬にしてあまりにも多くのものを失った。なせ自分だけが助かったのかと心も魂もどこかに行ってしまう気がして、震後直後はほんやりと高校を卒業したらどこかで働きたいと思っていました。けれど震災の後にはたぐさんの方々に出会い、世界が広がりました。人と人とのつながりの素晴らしさを知り、そしてその過程で芽生えたアメリカへの留学という夢は劇的なスピードで実現し、今年の6月からミシガン州の高校に留学して

見つけました。母と祖父は今も行方不明です。 たった一瞬にしてあまりにも多くのものを失った。なせ自分だけが助かったのかと心も魂もどこかに行ってしまう気がして、震後直後はほんやりと高校を卒業したらどこかで働きたいと思っていました。けれど震災の後にはたぐさんの方々に出会い、世界が広がりました。人と人とのつながりの素晴らしさを知り、そしてその過程で芽生えたアメリカへの留学という夢は劇的なスピードで実現し、今年の6月からミシガン州の高校に留学して

他人は助け合い、支え合っている。震災は合い、思いやりながら生きていくのだとあらためて実感した。ためたぐさんの方々からきっかけやチャンスを得たように、私も誰かにつけかけやチャンスを与えてくれる人間になりたいと思っています。

過去は過去でもう戻ることにはできません。でもこれからの自分の将来は変えることができるのです。当たり前ですが、私にとっても重みのある言葉です。時間は誰にも平等です。たぐさんや母さんのことをしよ、そう思います。将来はファッションデザイナーとして活躍人間になりたいと思っています。世界に貢献できる人間になりたいと思っています。そして単純な言葉ですが「幸せになる。これが私にできる唯一の親孝行です。き、自分が決めた道を突き進んでいくことが、母にあり、恩返しです。

今を自分らしく生き、自分が決めた道を突き進んでいくことが、母にあり、恩返しです。